



歡迎“雜家”

雜家を歓迎する

業務指導や科学研究を担っていくには、分野を問わず、専門知識は勿論のこと、さらに広い総合知識が求められる。言うまでもなく、前者は後者の基礎の上にあるのだ。専門知識の習得は簡単ではないが、条件さえ整えば短期間に、集中努力し、深く掘り起こせば一定の成果をおさめることができる。しかし、実際経験を含む総合知識は、短時間で習得できるものでなく、長年のたゆまぬ努力と、其の蓄積により始めて一人前の基礎ができる。基礎ができれば、専門課題を研究するにしても、軌道の上をすすむようなものだ。良い例がマルクスである、彼は多くの専門分野で大きな成功をおさめたが、彼は正に該博な知識をその基盤としたのである。

けれども、人によってはこの二者間の関係を抹殺し、専門学域の重要性を強調のあまりその孤立が危ぶまれるほど、総合知識の重要性を軽視する。彼らは己の検討違いにより、“広博”を“乱雑”とみなし、この二つを区別するすべを知らない。そして、彼らは知識該博の士に出くわすと、彼をただの“雑家”と見下す。



「淮南子」(えなんじ)
前漢の武帝の頃、淮南王劉安(紀元前179年-紀元前122年)が学者を集めて編纂させた思想書。道家思想を中心に儒家・法家・陰陽家の思想を交えて書かれており、一般的には雑家の書に分類されている。

ところがどっこい、真正正銘の“雑家”はとてつもない知識の所有者で、ちよいとそこいらには居ない。“雑家”とはこのような士を指すとすれば、我々はこれら“雑家”のお出ましに熱烈な歓迎の意を表さねばならぬ。

古人のいう“雑家”という区分は当初から合理的といえる品物ではなかった。班固は『漢書』『芸文志』において春秋戦国の諸氏百家を、して“九流”に分類した。いわゆる儒家流、道家流、陰陽流、法家流、名家流、墨家流、縦横家流、農家流そして雑家流だ。彼が言う所の雑家は“儒墨を合わせ、名法を兼ね”と『淮南子』『呂氏春秋』等は述べている。時代が下り、後人がこの名称を援用したために、その意義が更に曖昧模糊となった。その実、『淮南子』の著作が、その他各家の著作と比べて、どこに“雑”なところがあるのか。儒家の本家、孔子・孟子伝世の作品にしても、その内容は万象を網羅するなんでもかんでもの寄せ集めではないか。孔・孟の書をどうして雑家にいれなかったのか、班固の腹がわからない？

知識の分類、並びに思想や学術流派の区分について、現在の我々は、古人より賢明で、科学的である。いいかげんに班固の分類法から卒業すべき時ではないか。もし継続してそれらを用いるのであれば、雑家に新しい観念を注入して、該博高遠な知識を有する雑家達を我が思想界が歓迎し、異彩を放ってもらわねばならぬ。

旧時代の著名な学者は、程度の差こそあれみな雑家みたいなものだ。彼らの文集にはなんでもかんでも出てくる。だから、同じ一冊の本が、社会学研究者にとって有益であり、同時に自然科学研究者にも価値ある資料なのだ。手っ取り早い話が、清代の学者洪亮吉だ。彼の文集にしても、歴代の科学者の文集と同様、ほぼ森羅万象が網羅されており、その中にある人口論は、なんとダーウィンより半世紀も早いのだ。我国の古代学者の文集は、ほぼ百科全書といえるもので、すべて希少価値のある文化遺産である。



洪亮吉(こうりょうきつ 1746年-1809年)
中国清代の官僚・思想家。
『治平篇』という著作の中で中国の人口増加について述べている。マルサスの「人口論」の完成5年前、ダーウィンの「種の起源」より半世紀前のことであった。

現在もしも我々が“雑家”の広博な知識に由来する業務指導の教育的かつ科学研究の重要な意義を認めなければ、大きな損失として将来に悔いをのこすであろう。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

「歓迎 “雑家”」ひとそえ

「雑」ということへの考察は色々あります。岩波文庫で完結した『文選詩編(六)』の巻頭に「雑詩」「雑擬」について、・・・いずれも「雑」の字が冠されていますが、「雑」といっても「いろいろな」「多様な」という意味であって、「雑然」「粗雑」といった否定的な意味は伴いません・・・と書かれています。また連句でも春夏秋冬の句の間に「雑(ぞう)」の句を挟みますが、これも時事句やらやり句やら「多様」でよいとされています。

しかし、1960年代の中国でも「雑家」は否定的に扱われていたのでしょうか。作者は冒頭から、専門的学問と広博的知識を対句のように比較し、マルクスを持ち出して、広博知識の基礎があつてこそ専門学問が成就するのだと早々に結論を述べています。しかし、話の肝はそのあとだと感じます。

唐突に清代の洪亮吉を持ち出し、人口論に及び、ダーウィンに先んじていた、と述べます。ここではダーウィンではなくマルサスと書くべき処でしょうが、1950年代の毛沢東主導の人口増進政策に異を唱えた馬寅初が徹底的に批判された余燼がくすぶっていた時期なのでマルサスの名前を控えたのでしょうか。洪亮吉も長くタブー視されていたせいも、日本でも扱う人が少ない中で『中国のマルサスと言われる洪亮吉の人口論』(1999 菊池道雄)という論文がありました。

『燕山夜話』の作者がもう一人の「雑家」としてタブー視されていた瞿秋白を意識していたかについては稿を改めたいと思います。

井上邦久

欢迎“杂家”原文

无论做什么样的领导工作或科学研究工作，既要有专门的学问，又要有广博的知识。前者应以后者为基础。这个道理十分浅显。

专门的学问虽然不容易掌握，但是只要有相当的條件，在较短时间内，如果努力学习，深入钻研，就可能有些成就。而广博的知识，包括各种实际经验，则不是短时间所能得到，必须经过长年累月的努力，不断积累才能打下相当的基础。

有了这个基础，要研究一些专门问题也就比较容易了。马克思在许多专门学问上的伟大成就，正是以他的广博知识为基础的。这不是非常明显的例证吗？

但是，有的人根本抹杀这两者之间的关系，孤立地片面地强调专门学问的重要性，而忽视了广博知识的更重要意义。他们根据自己的错误看法，还往往以“广博”为“杂乱”，不知加以区别。因而，他们见到知识比较广博的人，就鄙视之为“杂家”。

殊不知，真正具有广博知识的“杂家”，却是难能可贵的。如果这就叫做“杂家”，那末，我们倒应该对这样的“杂家”表示热烈的欢迎。

古人对于所谓“杂家”的划分本来是不合理的。班固在《汉书》《艺文志》中把春秋战国的诸子百家，很勉强地分为“九流”，即所谓儒家流、道家流、阴阳家流、法家流、名家流、墨家流、纵横家流、农家流和杂家流。他所说的杂家是“合儒墨，兼名法”，如“淮南子”、《吕氏春秋》等等。后人沿用这个名称，而含义却更加复杂。其实，就以《淮南子》等著作来说，也很难证明它比其他各家的著作有什么特别“杂”的地方。以儒家正统的孔子和孟子的传世之作为例，其内容难道不也是杂七杂八地包罗万象地吗？为什么班固不把孔孟之书列入杂家呢？

现在我们对于知识的分类，以及对于各种思想和学术流派的划分，比古人高明得多，科学化得多了。我们本不应该再沿用班固的分类法；如果要继续用它，就应该赋予它以新的观念，就应该欢迎具有广博知识的杂家在我们的思想界大放异彩。

旧时代知名的学者，程度不等地都可以说是杂家。他们的文集中什么都有。同样的一部书，对于研究社会科学的人有用，对于研究自然科学的人也有用，随便举一个例子吧。清代学者洪亮吉，他的文集和历来其他学者的文集一样，几乎无所不包，其中就包含有他的人口论著作，比达尔文还早半个世纪。我国古代学者的文集，几乎都可以算是百科论文集，都是值得珍视的文化遗产。

现在我们如果承认所谓“杂家”的广博知识对于各种领导工作和科学研究工作的重要意义，那将是我们的一大损失。